

武士の四国遍路

—徳島藩士の遍路日記を中心に—

松 永 友 和（徳島県立博物館学芸員／徳島地方史研究会）

A Samurai's Shikoku Pilgrimage

—focusing on the diary of a Tokushima samurai

Tomokazu MATSUNAGA

Curator, Tokushima Prefectural Museum

In recent years, research on the Shikoku pilgrimage has made steady progress with the discovery of new materials and the presentation of a variety of issues. The discovery of new sources is most notable in the study of pilgrimage in the Edo period, where a wide variety of sources were used to study the pilgrimage.

Regarding the diaries of the Shikoku pilgrims (hereinafter referred to as "pilgrim diaries") described in this paper, unreleased copies of these diaries are being discovered and introduced almost every year, both in and outside of Shikoku. Until now, the pilgrim diaries have been regarded as important records kept by the pilgrims themselves, and they have often been included in the history of research. Although the actual conditions of the Shikoku pilgrimage, such as the route, the number of days, meals, costs, cost, attire and luggage, lodging, entertaining others, and pleasure, have been revealed, there is no lack of research issues.

Therefore, in this paper, first, a survey was conducted on the currently known pilgrim diaries. As a result, it was shown that no more than ten pilgrim diaries were known until 2000's, but now fifty diaries can be found. The diaries were then divided into three major types based on the behavioral patterns of the pilgrims, and further divided into four types based on the status of the pilgrims: peasants, townspeople, monks, and samurai. It has been thought that samurai rarely made the Shikoku pilgrimage, but the Tokushima samurai's pilgrimage diaries, which will be discussed below, have modified this view. Next, the contents of two henro diaries written by the Tokushima samurai, specifically "Shikoku Tabi Nikki" by Morikawa Yasutada and "Shunka no Tsue" by Sansuikyo Ranshitsu, were introduced and some discussion was added. As a result, I confirmed the similarities and differences between the pilgrimage of the clan priests and the pilgrimage by farmers and merchants, and furthermore, I pointed out that the characteristics of the Shikoku pilgrimage of the clan priests, in addition to their status, were strongly reflected in their diaries: in the case of Morikawa, as a goldsmith (artisan), and in the case of Sansuikyo, as a man of letters (intellectual). Finally, like the samurai of the Tokushima clan, some samurai wrote their pilgrimage diaries, while others did not, suggesting that other samurai besides the Tokushima clan would have gone on the Shikoku pilgrimage.

はじめに

本稿は、徳島藩士が書き記した四国遍路の日記（以下、「遍路日記」と記す）を通して、百姓や町人の他に武士身分の者も四国遍路を行ったことを示すとともに、藩士の日記について紹介・考察するものである。近年、四国遍路に関する研究は、新たな史料の発見とともに多様な論点が提示されるなど、着実に前進していると言える⁽¹⁾。史料の発見という点では、江戸時代における遍路研究において顕著であり、様々な史料を駆使した研究が行われている⁽²⁾。

本稿で述べる遍路日記についても、四国の内外を問わず、未翻刻の古文書が次々と発見・紹介されているのが現状である⁽³⁾。これまで、遍路日記は巡礼者本人による記録として重視され、研究史においてしばしば取り上げられてきた⁽⁴⁾。四国遍路の行程、経路、日数、食事、費用、装束、荷物、宿泊、接待、娯楽などの実態

が明らかにされているが、さらに追究すべき課題も残されている。

本稿では、まず、現在知られている遍路日記について調査を行った。その上で、霊場巡礼者の行動様式をもとに日記を大きく3つに分類し、さらに身分をもとに、百姓、町人、僧、武士の4つに分類した。武士の四国遍路については、内田九州男氏による「四国遍路には近世社会の支配者だった武士の参加が全く見られません」⁽⁵⁾のコメントに代表されるように、これまでほとんど認識されていないが、徳島藩士の遍路日記の存在は従来の見解に修正を迫るものである。具体的に取り上げる史料は、守川保忠の「四国旅日記」（徳島県立博物館所蔵）と山水居蘭室の「春夏の杖」（個人蔵）である。

1 遍路日記について

(1) 概念と点数

遍路日記は、四国遍路の研究上非常に重視されているが、論者によってその捉え方には若干の差異があり、共有された概念は必ずしも同じではないように思われる。例えば、内田九州男氏は「巡礼者自身が筆記した記録（四国遍路の道中記）」と述べている⁽⁶⁾。一方、西聡子氏は「四国霊場巡拝意識（行動）を伴って作成された諸記録」とし、従来遍路日記として認識されていなかった酒井弥蔵の「旅日記」（徳島県立文書館寄託）をも遍路日記としての性格を併せもつ、と指摘している⁽⁷⁾。

遍路日記の概念については、後述する点数や分類（類型）と深く関わる点であり、さしあたり本稿では、①複数の四国霊場（札所）を参拝した人物が著述していること、②日々の出来事が記載されていること（少なくとも霊場を参拝した年代や期間が判明すること）の2つの条件を満たす日記、と捉えることにする。

その上で、遍路日記の点数について確認する。2001年に発行された『四国遍路のあゆみ』や内田氏のコメント（2014年）によれば、2000～2010年代前半は10点前後だったことがわかる⁽⁸⁾。その後点数は増加し、2016年発行の武田和昭氏『四国へんろの歴史』では、「四国辺路日記」（澄禅）の他に「遍路が残した日記」として15点が提示されている⁽⁹⁾。さらに井上淳氏は、「手元のデータを集めてみると20点を確認」と、特別展図録（2018年発行）に記している⁽¹⁰⁾。

筆者も、数年前から遍路日記の史料や翻刻に出会った際にはメモ書をするなど、日記について調査を始めた。表は江戸時代の遍路日記を一覧にしたものであり、管見の限り50点を確認することができる（2021年1月現在）。この増加は、①未翻刻の古文書が新たに発見・紹介されたこと、②従来、紹介はされていたが遍路日記として認識されていなかったこと、③紀行文も積極的に遍路日記の範疇に加えたこと⁽¹¹⁾などによる。表にあげた日記以外にも見落とししたものが多々あると思われるが、現時点で確認できる遍路日記を示すことは無意味ではないと考え、明示した次第である。今後、遍路日記の点数は増加するであろう。

(2) 分類（類型）

次に、四国霊場を巡礼した者が記録した日記の分類（類型）を試みたい。巡礼者の行動様式をもとに、次のような分類が可能であると考えられる。

- ①四国霊場一周巡礼型…四国霊場の参拝を主な目的とし、四国内を一周し巡礼する。
- ②四国霊場部分巡礼型…四国霊場の参拝を主な目的とし、四国内を部分的に巡礼する。
- ③複合霊場部分巡礼型…四国霊場以外の参拝を主な目的とするが、四国霊場も部分的に巡礼する。

上記のうち、①は従来から遍路日記として捉えられており、四国内を数ヵ月かけて一周するタイプである。四国外の霊場を参拝した後に、四国霊場を参拝するため四国内を一周した場合も①に含めている。②は西氏の論考⁽¹²⁾に接し、分類名を付けたものである。事例として、酒井弥蔵の旅日記「さくら卯の花旅日記」などが該当する。③は若干の説明を要する。例えば、金刀比羅宮参詣が目的で大坂から丸亀に行き近隣の札所を巡る場合や、金刀比羅宮参詣が目的で紀伊から阿波に行き阿波と讃岐の札所を巡る場合などがある⁽¹³⁾。現段階では、①と②を遍路日記として捉えることとする。

続いて、身分（属性）をもとに分類すると以下ようになる。

- ①百姓…上層農民（豪農や村役人）が中心。通過儀礼や隠居後の観光的要素がある
- ②町人…上層町人（豪商や町役人）が中心。商用（市場や販路の開拓）など経済的要素がある
- ③僧…澄禅「四国辺路日記」など
- ④武士…徳島藩士の日記（守川保忠「四国旅日記」と山水居蘭室「春夏の杖」）

表 江戸時代の遍路日記

番号	史料名	著者	年代	西暦	関連文献／所蔵・収蔵等
1	空性法親王四国霊場御巡行記	賢明	[寛永15年]	[1638]	伊予史談会編『四国遍路記集』（伊予史談会、1981年）、小松勝記「創作された四国へんろ資料『空性法親王四国霊場御巡行記』」（『第1回四国地域史研究大会—四国遍路研究前進のために—公開シンポジウム・研究集会報告書』、2009年）
2	四国辺路日記	澄禅	承応2年	1653	宮崎忍勝『澄禅「四国遍路日記」附・解説校注』（大東出版社、1977年）、近藤喜博『四国遍路研究』（三弥井書店、1982年）、柴谷宗叔『江戸初期の四国遍路 澄禅『四国辺路日記』の道再現』（法蔵館、2014年）
3	白水郎子記行	岡西惟中（江戸前期の俳人）	天和3年	1683	『伊予紀行文集』（編集兼発行者：武智雅一、発行所：愛媛国語国文学会、1966年）、愛媛県史編さん委員会編『愛媛県史 文学』（愛媛県、1984年）
4	四国辺路海道記	大淀三千風（江戸前期の俳人）	貞享2年	1685	『伊予紀行文集』（編集兼発行者：武智雅一、発行所：愛媛国語国文学会、1966年）、『四国遍路のあゆみ』（愛媛県生涯学習センター、2001年）、武田和昭『四国へんろの歴史』（美巧社、2016年）
5	四国辺路中万覚日記	讃岐国豊田郡井関村、佐伯藤兵衛	延享4年	1747	小野祐平「資料紹介 四国遍路道中日記」（『ミュージアム調査研究報告』6、2015年）
6	四国西国巡礼道中記・四国遍路道中記	上野国吾妻郡山田村、関利兵衛	寛延4年	1751	西海賢二『旅と祈りを読む 道中日記の世界』（臨川書店、2014年）
7	四国遍路記	金胎寺、吉雲法印	宝暦7年	1757	高嶋賢二・岡本佑弥・胡光「伊方町で発見された愛媛県内最古の遍路日記」（『四国遍路と世界の巡礼』4、2019年）
8	道中算用日記	大庄屋石井源次郎の妻、竹	明和2年	1765	小野ひさ「春光院高岸妙遊大姉四国巡拝旅日記」（『江戸期おんな考』15、桂文庫、2004年）、宮口公子「石井春光院の四国巡拝」（『江戸期おんな考』15、桂文庫、2004年）
9	四国道中日記	周防国玖珂郡藤谷村、片山武七	明和5年	1768	山口県立文書館所蔵（片山家文書（美和町）48）。平成27年度古文書解説自主グループ「けやきの会」解説。史料写真及び翻刻は、山口県立文書館運営「古文書講座の成果とテキスト」（ http://archives.pref.yamaguchi.lg.jp/user_data/upload/File/kouza-kaidoku/H27g-06.pdf ）公開画像データを2021年1月24日に最終閲覧。
10	四国中辺路旧跡并宿附帳	阿波国那賀郡和田島村、森瀬左衛門	安永6年	1777	鶯敷町古文書研究会編『四国遍路と高野参り道中記 阿波国和田島村森家文書 安永六年（1777）』（鶯敷町古文書研究会、2002年）
11	道中記（四国八十八ヶ所巡り）	武蔵国多摩郡大谷村、大谷治左衛門	天明9年	1789	『江戸時代の庶民の旅 八王子鈴木佐平次道中日記』（編集・発行：古文書を探る会、1981年）、鈴木正生氏（八王子市郷土資料館）のご教示による
12	四国中諸日記	伊予国伊予郡上野村庄屋、玉井元之進	寛政7年	1795	喜代吉榮徳『四国辺路研究』12（海王舎、1997年）
13	四国遍礼名所図会	阿波国那賀郡富岡町、河内屋武兵衛	寛政12年	1800	伊予史談会編『四国遍路記集』（伊予史談会、1981年）、徳島市立徳島城博物館編『四国遍路と徳島藩』（徳島市立徳島城博物館、2020年）
14	四国遍路道中日記	紀伊国学文路	享和2年	1802	小野祐平「資料紹介 四国遍路道中日記」（『ミュージアム調査研究報告』6、2015年）
15	四国霊場順拝日記	阿波国勝浦郡小松島浦藍商、七条六右衛門（江戸積藍商、七條彦四郎）	享和3年	1803	井上淳「近世後期における阿波小松島商人の遍路日記」（『研究最前線 四国遍路と愛媛の霊場』、愛媛県歴史文化博物館、2018年）
16	四国遍路道中入用帳	備中国地主溝手家の代参、長津氏	文化元年	1804	新城常三『新稿 寺社参詣の社会経済史的研究』（塙書房、1982年）1082頁
17	四国中道筋日記	土佐国土佐郡朝倉村、西本兼太郎	文化2年	1805	喜代吉榮徳『四国辺路研究』11（海王舎、1997年）
18	四州旅日記宰府路記有	阿波国那賀郡花瀬村、露口氏	文化5年	1808	徳島県立文書館収蔵（露口家文書ヲク00181）。谷恵子氏（徳島の古文書を読む会）のご教示による
19	四国西国順拝記	京都烏丸通五条下ル商人、升屋徳兵衛	文化6年	1809	井上淳「資料紹介 四国西国順拝記」（『研究紀要』6、愛媛県歴史文化博物館、2001年）、井上淳「道中日記にみる四国遍路」（『研究紀要』11、愛媛県歴史文化博物館、2006年）
20	四国旅日記	阿波国名東郡下八万村徳島藩士、守川保忠（橋本鹿太郎）	文化10年	1813	橋本亀一編『八万村徳島市合併記念 家郷』（発行：橋本亀一、1938年）、武間達也「資料紹介『四国旅日記 一鶴斎』～阿波金工・守川保忠巡礼日記から」（『刀剣美術』549、2002年）
21	四国日記	備中国都宇郡別府村、平松愛山ほか2名	文化11年	1814	岡山県立図書館所蔵（資料番号0002046720）。隈元恒氏（岡山県立図書館）のご教示による

番号	史料名	著者	年代	西暦	関連文献／所蔵・収蔵等
22	春夏の杖	阿波国美馬郡猪尻村、徳島藩稲田家 家臣、山水居蘭室	文化12年	1815	脇町史編集委員会編『脇町史 上巻』（脇町、1999年）
23	四国中泊り諸 入用覚帳	大谷代次郎	文化15年	1818	『吉井町史 史料編上』（吉井町、1991年）
24	四州行程記	森在満	文政2年	1819	『近世高瀬の村々1』（高瀬町教育委員会、2003年）、武田和昭『四国へんろの歴史』（美巧社、2016年）293頁
25	四国順拝日記 （四国日記）	土佐国北川郷長山村商人、新井頼助 （新居来助）と彦兵衛	文政2年	1819	『高知県史 民俗資料編』（編集・発行：高知県、1977年）、愛媛県生涯学習センター『四国遍路のあゆみ』（愛媛県生涯学習センター、2001年）77-78頁
26	四国順拝道中 記	周防国玖珂郡柳井津町、小田氏	文政5年	1822	山口県立文書館所蔵（小田家文書（柳井市金屋）898）。平成26年度山口県文書館古文書実践講座（3班）解説。史料写真及び翻刻は、山口県立文書館運営「古文書講座の成果とテキスト」（ http://archives.pref.yamaguchi.lg.jp/user_data/upload/File/kouza-kaidoku/H26g-01.pdf ）公開画像データを2021年1月24日に最終閲覧。
27	四国順拝道中 記	徳島城下紀伊国町町人、宮田菅五郎	文政11年	1828	井上淳「近世後期における徳島町人の遍路日記ー「四国順拝道中記」の紹介ー」（『伊予史談』399、2020年）
28	四国順拝日付 帳（四国中御宿 并入用控）	摂津国有馬郡大川瀬村、伝蔵	文政11年	1828	愛媛県歴史文化博物館編『四国遍路と巡礼』（愛媛県歴史文化博物館指定管理者イコテツケーターサービス、2015年）資料番号3-8
29	南海阿讃二国 順拝	讃岐国小豆島坂手村年寄、壺井氏（七左衛門義重他家族）	文政11年	1828	胡光「小豆島伝来文書から見た巡礼の諸相」（橋詰茂編『戦国・近世初期西と東の地域社会』岩田書院、2019年）
30	四国遍路連々 艸	阿波国那賀郡南荒田野村、馬場花屋 （道楽斎）	天保元年	1830	阿部明子『四国を駆け抜けた男道楽斎 天保元年「四国遍路連々艸」より』（新風舎、2006年）
31	四国順礼道中 記録	讃岐国三野郡吉津村庄屋、新延氏	天保4年	1833	喜代吉榮徳『四国辺路研究』3（海王舎、1994年）
32	四国八拾八ヶ 所順拝旅中日 記日並帳	山城国愛宕郡中畑村、波多野富太郎	天保5年	1834	東昇「天保五年山城國中畑村波多野富太郎の四国順拝」（『伊予史談』399、2020年）
33	道中記	周防国吉敷郡吉敷村庄屋、野村家夫妻	天保5年	1834	山口県立文書館所蔵（野村家文書（山口市）1338）。平成27年度古文書解説自主グループ「けやきの会」解説。史料写真及び翻刻は、山口県立文書館運営「古文書講座の成果とテキスト」（ http://archives.pref.yamaguchi.lg.jp/user_data/upload/File/kouza-kaidoku/H27g-07.pdf ）公開画像データを2021年1月24日に最終閲覧。
34	四国遍路中并 接待附万覚帳	武蔵国幡羅郡中奈良村、野中彦兵衛	天保7年	1836	喜代吉榮徳『四国辺路研究』4（海王舎、1994年）
35	〔逃亡日記〕	甲斐国都留郡犬目村、兵助	天保7～8年	1836～38	増田広実「甲州郡内騒動頭取犬目村兵助と「逃亡日記」その他（史料紹介）」（『歴史評論』338、1978年）、同「一揆の道」『歴史の道・再発見』2巻（フォーラムA、1997年）
36	四国順拝手控	播磨国加西郡窪田村庄屋、山下和祐	天保10年	1839	田中智彦「道中日記にみる畿内・近国からの寺社参詣」（『聖地を巡る人と道』岩田書院、2004年、初出2002年）、萩原康仁氏（加西市教育委員会）のご教示による
37	四国順拝日記	備前国赤磐郡下塩木村庄屋、角南恵左衛門	天保12年	1841	山本秀夫「旅としての「へんろ」」（『近世瀬戸内「浦」社会の研究』清文堂出版、2011年、初出2004年）
38	西国四国所々 泊帳 参詣所 并其他日記控 帳	駿河国駿東郡大御神村、天野文左衛門	天保13年	1842	大藤修「史料紹介 農民の旅日記」（『小山町の歴史』3、1989年）、大藤『近世の村と生活文化』（吉川弘文館、2001年）
39	四国道中日記	讃岐国多度郡生野村、高田虎蔵広親	天保13年	1842	山本秀夫「旅としての「へんろ」」（『近世瀬戸内「浦」社会の研究』清文堂出版、2011年、初出2004年）
40	道中小遣留帳	越中国新川郡太田本郷村、浮田家隠居	天保14年	1843	近藤浩二「越中からの四国遍」、塚本明・近藤浩二・胡光「史料編 巡礼と「道中日記」の諸相」（『2013年度四国遍路と世界の巡礼 公開講演会・公開シンポジウム プロシーディングス』、2014年）
41	四国順拝諸扣 帳	阿波国名西郡上山村庄屋、栗飯原権左衛門清胤	天保15年	1844	栗飯原権左衛門著、中山馨解説『天保十五年 四国順拝諸扣帳 解説版』（神山町文化財保護審議会、1996年）

番号	史料名	著者	年代	西暦	関連文献／所蔵・収蔵等
42	四国遍路道中雑誌	伊勢国一志郡須川村郷土、松浦武四郎	弘化元年	1844	松浦武四郎著、武四郎を読む会解説、佐藤貞夫編『四国遍路道中雑誌』（松浦武四郎記念館、2018年）
43	四国日記	筑前国宗像郡津屋崎村商人、佐治徳左衛門	弘化2年	1845	胡光「『遍路日記』に見る四国、その内と外と」、塚本明・近藤浩二・胡光「史料編 巡礼と『道中日記』の諸相」（『2013年度四国遍路と世界の巡礼公開講演会・公開シンポジウム プロシーディングス』、2014年）
44	散る花の雪の旅日記	阿波国美馬郡半田村商人、酒井弥蔵	弘化4年	1847	『酒井家文書総合調査報告書 徳島県立文書館学術調査報告』（編集・発行：徳島県立文書館、1997年）、『史料集（三）堺屋弥蔵の旅日記』（編集・発行：徳島の古文書を読む会五班、2005年）、西聡子「近世後期の遍路日記に関する基礎的考察」（『書物・出版と社会変容』20、2016年）
45	旅日記法農桜	阿波国美馬郡半田村商人、酒井弥蔵	嘉永3年	1850	『酒井家文書総合調査報告書 徳島県立文書館学術調査報告』（編集・発行：徳島県立文書館、1997年）、『史料集（三）堺屋弥蔵の旅日記』（編集・発行：徳島の古文書を読む会五班、2005年）、西聡子「近世後期の遍路日記に関する基礎的考察」（『書物・出版と社会変容』20、2016年）
46	極楽花の旅日記	阿波国美馬郡半田村商人、酒井弥蔵	嘉永4年	1851	『酒井家文書総合調査報告書 徳島県立文書館学術調査報告』（編集・発行：徳島県立文書館、1997年）、『史料集（三）堺屋弥蔵の旅日記』（編集・発行：徳島の古文書を読む会五班、2005年）、西聡子「近世後期の遍路日記に関する基礎的考察」（『書物・出版と社会変容』20、2016年）
47	四国遍路入用萬日記扣帳	阿波国那賀郡七見村、亀八	嘉永5年	1852	阿南市史編さん委員会編『阿南市史2巻』（阿南市教育委員会事務局、1995年）1255-1261頁
48	四国八拾八ヶ所日記帳	武蔵国埼玉郡懸新田、清水和吉	嘉永7年	1854	『岩槻市史 近世史料編Ⅳ 地方史料（下）』（岩槻市市史編さん室、1982年）
49	さくら卯の花旅日記	阿波国美馬郡半田村商人、酒井弥蔵	安政6年	1859	『酒井家文書総合調査報告書 徳島県立文書館学術調査報告』（編集・発行：徳島県立文書館、1997年）、『史料集（三）堺屋弥蔵の旅日記』（編集・発行：徳島の古文書を読む会五班、2005年）、西聡子「近世後期の遍路日記に関する基礎的考察」（『書物・出版と社会変容』20、2016年）
50	道中手扣帳	肥前国長崎寄合町老舗遊郭、山口茂左衛門（花月楼主人）	安政7年	1860	永松実編『花月楼主人の巡礼道中 安政七年『道中手扣帳』と庶民の旅』（えぬ編集室、2019年）
参考1	四国西国順礼道中記	越前今庄（越前国南条郡今庄）、山口広助	明治5年	1872	林義博『豪農広助の巡礼路をたどる 広助・弟権五郎の巡礼日記を読み解く』（2017年）
参考2	四国中井高野道中記	高知県高岡郡越知面村、中越善平夫妻	明治17年	1884	『高知県史 民俗資料編』（編集・発行：高知県編、1977年）
参考3	四国巡拝記	中井三郎兵衛（京都向日町駅付近在住）	明治29年	1896	徳島県立図書館所蔵（岩村武勇文庫）

※「史料名」「著者」「年代」は、史料（原本または写真）や翻刻で確認した。また、論考等で紹介されているものは、本文の内容から判断した。「関連文献」は、そのすべてではない。なお、参考として明治期の日記を加えた。

上記のうち、①と②が遍路日記の大半を占め、江戸時代後期になるに従い点数は増加する。③は澄禅「四国辺路日記」に代表されている。④は従来ほとんど注目されることはなかったが、内容から判断して遍路日記と捉えることができる。以下、徳島藩士の遍路日記を紹介する。

2 守川保忠「四国旅日記」について

(1) 概要

四国遍路を行った守川保忠の「四国旅日記」について詳述する前に、人物と史料の概要について確認する。¹⁴⁾ 守川保忠（1781～1837）は、徳島藩の武士身分の者で、名を橋本鹿太郎といった。橋本家は徳島城下ではなく、城下近郊の下八万村（徳島市八万町）に位置し、鹿太郎は天明元年（1781）に下級武士・橋本梶助の嫡男として生まれる。藩士としては父梶助が初代で、鹿太郎は2代目であった。藩士鹿太郎は、金工（職人）としてその名が知られている。¹⁵⁾ 金工浜野保随の弟子となり、守川保忠（号一雀斎）と名乗り、刀装具などの金工品を造ることを内職とした。守川は母方の姓であった。

次に、職歴を確認しよう。¹⁶⁾ 文政3年（1820）、鹿太郎が41歳のとき御料理方見習（徳島城内や藩邸の料理

係の見習)¹⁷⁾となり、その2年後の文政5年に父梶助が死去し跡を継いでいる。その後、文政7年に上ヶ方御奉行、文政9年に受払方御奉行、文政11年に御料理方、文政12年に南浜御屋敷御台所惣受持御用をつとめるなど、城内や藩邸での料理を担当する役職を歴任している。天保5年(1834)、嫡子卯之丞が御料理方見習となり、その3年後に病により死去している。なお、橋本家の檀那寺は下八万村の長久寺(真言宗)である。

さて、鹿太郎が四国遍路を行ったのは文化10年(1813)であり、33歳のときであった。日記の冒頭には、文化10年に「四国巡拝をおもひ立」とあるが、遍路を行った具体的な理由は不明である。当時、鹿太郎は御料理方見習に就任する以前であり、庄屋の息子が家督を継ぐ前に遍路を行う事例のように、家督を継ぐ前の通過儀礼的な意味合い、あるいは知識や経験を身につけることが遍路の目的であったのかも知れない。なお、同行者の名前は記されていないが、日記に「同行ハ申におよわす」などの記載があることから、複数人で遍路を行ったものと推測される。

続いて、史料の概要について述べる。「四国旅日記」¹⁸⁾(図1)は縦帳で、「四國旅日記」と記された表紙をめくると挿絵が描かれている。その右側には「一雀」の署名と「守川保忠」・「橋本蔵書」と刻字された印が押印されている。「橋本蔵書」印は後年に押印された可能性があるが、「一雀」の署名と「守川保忠」印の押印は、鹿太郎自身によるものと思われる。つまり、橋本鹿太郎は「守川保忠」として四国遍路を行ったと言える。以下、内容を紹介する。

(2) 内容

守川保忠の「四国旅日記」を読み進めると、四国遍路の①行程、②宿泊、③番所、④接待など、様々な情報を与えてくれる。以下、各々の項目に従い紹介する。

① 行程

守川は文化10年(1813)2月27日に阿波国を出立し、3月4日に土佐、3月21日に伊予に入国する。その後安芸国の厳島に立ち寄り、4月6日に伊予国に戻るのを最後に日記の記述が終わる。出立では、居住地の下八万村から南下し、恩山寺(18番札所)で札納めをしている。その後は札所の順番に従って霊場を巡拝している。阿波国で7日間、土佐国で18日間、伊予国で11日間、安芸国で6日間を過ごしたことが日記からわかる。守川の遍路の特徴として、①旅中はすべての霊場(札所)に立ち寄り札納めや札打ちを行い、そのことを日記に記載していること、②宿泊地や接待の他に珍しい食べ物や飲酒などの記載があることである。

② 宿泊

他の遍路日記と同様、守川も宿泊に関する情報を日記に記している。宿泊先は、茶屋や宿屋の他に村・町の百姓・町人宅に宿泊し、また個人名も記載されることがある。例えば、阿波国日和佐浦(海部郡美波町)の平戸屋お谷(日記の文化10年3月1日条、以下年を省略する)、海部奥浦(海部郡海陽町)の町若右衛門様(3月3日条)、「くぼ川浦」(高岡郡四万十町)の井筒屋与右衛門様(3月17日条)といった具合である。

その他、日記には「六たんち村」(高岡郡四万十町)において「ほふしや宿」に泊まるが「何角とふじう成ル宿」のため未明に出立したこと(3月13日条)、「大家」を見ては宿を頼んでいたところ「しゅげんの御家ニ御善言にて、結構なる御宿」に宿泊したこと(3月20日条)、「家がら」を見立て庄屋の家に一宿したところ「何角御善言の御宿」だったこと(4月2日条)、などが記されている。遍路が道中において宿泊で難儀することはしばしばあったが、武士身分の守川も同様であったことがうかがえる。

③ 番所

守川は、阿波の番所では、つつがなく「往来之御切手」を合わせ通過したと記すが(3月4日条)、土佐甲浦の番所では状況は異なっていた。まず、番所の手前で遍路の群衆を目にする。守川が番所で役人に切手を差し出すと、役人から「まず控えよ」とあらあらしく言われ先を急ぐことができない。半時(約1時間)後ようやく通過できたようである。その後、通過するだけでも「おそろしい鬼国」¹⁹⁾と話しながら野根(安芸郡東洋町)まで急いだことが日記に記されている(3月4日条)。

土佐国では、伏越(安芸郡東洋町)の番所で切手の裏書を済ませ(3月5日条)、大深浦村(宿毛市)の番所で「あがり切手」を提出し伊予に入国する(3月21日条)。伊予国の番所では、「御切手」を提出し早々に通過できたようである。伊予に入国したときの心情を、「扱も人家の様子、山までも土佐とハ事替り、いと和らしておもしろふ見へにけり」と記しており、余程土佐国の道中が窮屈なものであったかがうかがえる。



図1 守川保忠「四国旅日記」(徳島県立博物館所蔵)
左上・表紙、右上・挿絵と署名・印、下・本文(冒頭)

る。宇和島と大洲の境の番所では、宇和島の「あがり御切手」を提出し通過している（3月26日条）。

以上、日記からは阿波・土佐・伊予国の番所において「切手」（往来手形）の照合や発行、裏書（確認）、提出（返還）などが行われたことがわかる。藩によって遍路への対応・統制は共通点と相違点があると言われるが、²⁰⁾それは武士身分の者も同様であった。

④ 接待

道中の接待について、守川の日記には9日間にわたり関連する記事があり、列記すれば以下のとおりである。中角村（勝浦郡勝浦町）で餅の接待（2月28日条）、節句の餅を沢山もらう（3月2日条）、西寺（26番札所）の縁先で接待を受ける（3月6日条）、鳴無村（須崎市）で接待（3月12日）、御免町のはずれで結構なる接待（3月13日）、四万十川辺りで5の接待（煎り物・香の物・草鞋・赤飯・髪結）（3月16日条）、宿毛（宿毛市）から伊予国の入口で11の接待、珍味の接待に預かる（3月21日条）、内子（喜多郡内子町）で結構なる接待（3月27日条）、浄瑠璃寺（46番札所）から石手寺（51番札所）辺りで結構なる接待（3月30日条）である。

接待について、胡光氏は次のように指摘する。²¹⁾

四国遍路時の記述の特徴は、「摂待」（接待）が現れることである。（中略）まさに接待は、四国遍路の特徴であることを当時の人も認識していたのである。豪商一行にとっては、接待を受けずとも旅は可能であったが、接待を受けることも遍路には重要であって、町場で行っている「しゅ行」（修行／門付）とともに巡礼の旅の特徴を示している。接待の内容は様々で、食料が最も多いが、月代髪結い、草鞋など、遍路に必要なものが全て含まれている。

守川も他の遍路と同様、食料の他に草鞋や髪結いなどの接待を受けている。守川は日記に、「其余結構なる御接待は日々に数々あり、しかれ共筆紙二も尽されず、ありかたきこと共也」（3月30日条）と書き記している。守川の場合、接待を受けなくても旅を行うことは可能であったと考えられるが、多くの接待を受けるなかで感謝の念を抱くようになったと考えられる。

(3) 特質

次に、守川保忠「四国旅日記」の特質について考えてみたい。「四国旅日記」は徳島藩士の守川による記録だが、当時守川は家督を継ぐ前であり、その意味で庄屋の息子が家督を継ぐ前に行う四国遍路と共通する要素がある。ただし、藩士（武士）としての意識・要素が日記に現れる場面がある。例えば、太龍寺（21番札所）への参詣時に徳島藩主の「御成りの間」を訪れ、それを日記に書き留めている（2月晦日条）。

この日、守川が太龍寺に到着すると、まず寺の中へ案内され、上の間の御仏前を通り、金泥の「弘法大師御自筆の（法華経）の巻」など、いくつかの宝物を「拝覧」する。そして本尊の「千手観音」や脇立の「不動毘沙」を見た後、「夫より上の間へ通り、大守様御成り間とて上段の間に狩野の懸物ならびに六枚屏風、残る所なく拝覧」している。武士身分である守川は、おそらく太龍寺側からの厚遇により寺宝を見た後、さらに藩主御成りの間に行くことができたのであろう。百姓・町人身分と武士身分の者では、霊場（札所）で受ける対応はおのずと異なっていたものと考えられる。

「四国旅日記」に藩士（武士）としての側面をうかがわせる記事がある一方で、守川は金工（職人）でもある。金工としての側面も日記に散見される。例えば、大洲城下で名高い刀鍛冶や目貫・縁頭の彫物師などを訪問したこと（3月26日条）、巖島神社で「千帖じき」（千畳閣）などを見物し、大工や欄間職人について注記していること（4月4日条）である。

以上、守川保忠「四国旅日記」の特質として、藩士（武士）と金工（職人）の意識・要素をうかがわせる記述がある点を指摘した。次に、山水居蘭室「春夏の杖」を取り上げる。

3 山水居蘭室「春夏の杖」について

(1) 概要

守川保忠の他に四国遍路を行った者に、徳島藩家老稲田家家臣の山水居蘭室（1759～1841）がいる。²²⁾山水居蘭室は猪尻村（美馬市脇町）に居住し、名を山下壬生右衛門、俳号を臥林庵といった。近郷の多くの弟子を指導し、山水居蘭室と子の渡橋（美馬助）、孫の浮島（寅一郎）の3代にわたり、俳諧の宗匠をつとめた。文化12年（1815）に遍路を行ったとき蘭室は57歳であり、遍路の終了後に「春夏の杖」を書き記している。



図2 山水居蘭室「春夏の杖」(個人蔵)
左上・表紙、右上・序文(部分)、下・本文(2月28日条)

次に、同行者について記す。蘭室の遍路の同行者は、三宅吐月、上田一松²³、荷持ちの幸吉の3人がいたことが「春夏の杖」序文からわかる。三宅吐月（1774～1832）は稲田家家臣として猪尻村に居住し、名を三宅小一郎といい、静処と号した²⁴。遍路を行ったとき、小一郎は42歳であった。

上田一松（1777～1844）も蘭室・吐月と同様、猪尻村に居住した稲田家の家臣で、名を上田官兵衛といった。酒造を営む内田徳兵衛の子として生まれ、後に稲田家家臣の上田文作の跡を継ぐ。女性史研究で知られる上田美寿（1783～1857、三宅松庵の子、小一郎の妹）²⁵の夫である。遍路を行ったとき、官兵衛は39歳であった。なお、山下家・三宅家・上田家の檀那寺は、猪尻村の最明寺（真言宗）である。

続いて、史料の概要について述べる。「春夏の杖」²⁶（図2）は縦帳で、「春夏の杖」と記された表紙をめくると、応呼龍の序文が記されている。応呼龍（1756～1834）は、名を武田宗作（昌雄）といい、楽水舎と号した。稲田家家臣で猪尻村に居住し、神全塾を経営したことで知られている²⁷。蘭室は、文化12年（1815）2月から4月にかけて遍路を行い、8月に「春夏の杖」を上梓する。百姓や町人が記した遍路日記とは趣が異なり、紀行文として文芸作品的修飾が施され、日々の出来事とともに俳諧が記されている。「春夏の杖」の後半には、「山水居」「蘭室」と刻字された印が押印されている。以下、内容を紹介する。

（2）内容

山水居蘭室の「春夏の杖」も守川保忠の「四国旅日記」と同様、様々な情報を与えてくれる。ただし、「四国旅日記」とは異なり、接待に関する記事はない。また道中の金銭についての記載もなく、この点は「春夏の杖」の史料（紀行文）としての特徴・性格と言えよう。以下、四国遍路の①行程、②宿泊、③関所（番所）、④遍路（修行者）の描写、について紹介する。

① 行程

山水居蘭室は、文化12年（1815）2月27日に阿波国を出立し、3月7日に土佐、3月24日に伊予、4月13日に讃岐に入国し、4月25日に阿波国に帰着している。出立では、居住地の猪尻村から東・南方面に進み、翌28日に焼山寺（12番札所）に到着し、以後は札所の順番に従って霊場を巡拝している。阿波国で11日間、土佐国で18日間、伊予国で19日間、讃岐国で13日間を過ごしたことがわかる。蘭室の遍路の特徴として、①阿波国における1番から10番までの札所の記載が見られないこと、②真念の「四国徧礼道指南」を頼りに遍路を行ったこと（3月11日条に「真念の道記をさくりさくりて、山をこえ海辺に出て」との記載がある）、③宿泊先の他に、珍しい食べ物や飲酒などの記載が見られるが、最大の特徴は、先述したように④毎日のように、山水居蘭室・三宅吐月・上田一松らの俳諧が記されていることである。蘭室らの遍路は、俳諧を詠むために行われたと言っても過言ではないだろう。

② 宿泊

山水居蘭室の「春夏の杖」にも、他の遍路日記と同様、毎日ではないが宿泊に関する情報が記載されている。宿泊先は、旅籠や宿屋、知人宅の他に、村・町の百姓・町人宅に宿泊している。個人名が記される場合や村名のみが記載される場合もある。例えば、「川田なるゆかりの枚岡氏何かしの家」（2月27日条）、「さうち村」（（左右内村）名西郡神山町）（2月28日条）、「中村手塚何かしの家」（江戸積藍商の手塚六三郎家）（2月29日条）、「城下の旅籠屋」（2月晦日）、「薬王寺にもふてゝ、山門の側にやとる」（3月5日条）、「鞆浦に旧友岡井氏宇林か幽栖を訪ふ、草臥て宿かる」（3月6日条）窪津（土佐清水市）で上田一松の知人宅に泊まる（3月20日条）などである。

宿泊時の感想もつづられており、土佐の和食（安芸市）では、「漁家のやとりにて、宿のつらさなど、旅の習ひにいゝもて行ぬ」（3月12日条）とあるように、宿泊先で苦勞する場面もあったようである。また、土佐の窪川（高岡郡四万十町）では、「窪川の町へ下る、ミの峠に宿牽の女とも出て、口々に泊りを囁る、聲かまひすし」（3月16日条）とあり、窪川で宿の客引きに会い、それに呼びこまれて宿泊したことが記されている。これらの情報は、道中の様子を知る上で興味深い。

③ 番所

番所については、守川の「四国旅日記」には比較的詳しく記載されているのに対し、蘭室の「春夏の杖」には関所（番所）の名前が記される程度である。例えば、「阿・土の境なる古目と聞へける浦山に関所あり、又土佐の領に入て、かんの浦にも関あり」（3月7日条）などである。また、土佐と伊予の境では次のように記されている（3月24日条）。

宿毛を立て、土・与のさかゐなる松尾坂こゆるとて

ほとゝきす 爰を隣に 松尾坂
行春や 関のあなたに 衾尾坂
百里来た 春を見かへる 峠かな 松

(山水居蘭室)
蘭
(三宅吐月)
吐
(上田一松)

蘭室ら一行にとっては、関所（番所）を通過することはもちろん、旅の出来事をいかに俳諧として表現するかに重きがおかれていたように思われる。その点は、次に見る遍路（修行者）の描写についても同様である。

④ 遍路（修行者）の描写

蘭室の「春夏の杖」には、遍路（修行者）が描写されている。例えば、阿波の日和佐（海部郡美波町）で多くの修行者の笠が斜めに続いている情景を見て、次のように詠んでいる（3月5日条）。

山形りに つゝく道者や 笠の花 松

また、青龍寺（36番札所）の巡拝後に井尻（土佐市）から横浪（須崎市）までを舟で移動した際に、舟中で修行者が珠数を繰りながら真言念仏のみを唱える情景を見て、

舟に生けし 藤や手舟に 珠数の玉 蘭
商人も ましらぬ船や 笠の花 松

と詠んでいる（3月15日条）。さらに岩屋寺（45番札所）では、修行者が絶壁に登る情景に接し驚嘆したのであろう、次のように描写している（4月1日条）。

山にせりわりの禅定とて、千仞の谷に修める岩壁ありて、それか中を攀あかれハ、又鎖かつらやうのものをかけわたして、絶壁に上る、権者修行のものハ、白き布の鉢巻にたまたすきなど、いかめしくこしらへて、猿の橙をわたることく、つらつらとかつらをたよりに、とりのほるをみるも、すさまじくものよ 岩這ふ蟹の 涼しさに 松

目の前で、絶壁を「岩這う蟹」のごとくよじ登る修行者を見て、「凄まじい」との感想を記すとともに、修行者の装束（白い布の鉢巻に襷）についても記載が及ぶ。蘭室は、自ら遍路を行いながら一人の観察者として修行者を描写したのである。

(3) 特質

次に、山水居蘭室「春夏の杖」の特質について記す。守川の「四国旅日記」と同様、藩士（武士）としての意識・要素が日記に現れる場面がある。例えば、土佐国の安芸では、「むかし安喜氏備後守」の所領で小高き丘に城跡があること（3月11日条）、土佐の国分寺から一宮の辺りでは、「野中氏何かしといへる官人の功」により用水や田が整備されたこと（3月12日条）などが記録される。「安喜氏備後守」は戦国時代の武将・安芸国虎（1530～69）を指し、「野中氏何かし」は土佐藩家老・野中兼山（1615～63）を指している。

山水居蘭室は藩士（稲田家家臣）であり、また文化人（俳諧の宗匠）でもある。「春夏の杖」には、文化人としての側面をうかがわせる記事が散見される。例えば、山崎宗鑑の一夜庵への訪問（4月14日条）、西行の旧跡への訪問（4月14・15日条）などである。ただ、上記は文化人ならば誰しも訪れる場所であると言えよう。より特徴的な点は、蘭室の俳諧の師・博和坊（1738～1810）に関する記事である。例えば、岩本寺（37番札所）の僧月戸との会話では、河村再和坊（江戸中期の俳人、1726～86）と博和坊とのエピソードについて語ったこと（3月16日条）、多度津（仲多度郡多度津町）では、博和坊の廟所を訪れたこと（4月16日条）などである。蘭室が遍路を行う5年前の文化7年（1810）に博和坊は死去しており、蘭室にとって師・博和坊の廟所への訪問は旅の目的の一つであったのかも知れない。

以上、山水居蘭室「春夏の杖」の特質として、藩士（武士）と文化人（俳諧の宗匠）の意識・要素をうかがわせる記述がある点を指摘した。より踏み込んだ特質把握については、今後の課題としたい。

おわりに

以上、遍路日記について概観した上で、徳島藩士の日記を紹介し若干の考察を加えた。最後に、本稿のまとめと課題を記しておきたい。

まず、遍路日記について、管見の限り50点を確認することができる（2021年1月現在）。これまで遍路日

記は、四国霊場を参拝し四国内を一周した遍路の日記（本稿では「四国霊場一周巡礼型」と分類）と捉えられる傾向にあった。それ以外にも、四国霊場の参拝を主目的とし、四国内を部分的に巡礼した日記も遍路日記に含めるべきである（本稿では「四国霊場部分巡礼型」と分類）。その他、四国霊場以外の参拝を主目的とするが、四国霊場も部分的に巡礼した日記（本稿では「複合霊場部分巡礼型」と分類し、現段階では遍路日記に含めていない）も多数存在するが、その位置づけについては今後の課題である。また、従来武士は遍路を行っていないと認識されてきたが、本稿で紹介したように遍路を行った徳島藩士が存在することから、上記の認識・見解は修正されるべきであろう。

次に、徳島藩士の遍路日記の内容について、守川保忠「四国旅日記」と山水居蘭室「春夏の杖」から判明する点は以下のとおりである。

- ①道中での宿泊は、両者ともに旅籠や知人宅の他に、百姓・町人宅に宿泊している。また善根宿に泊まることもあった。
- ②番所を通過する際は、武士身分の者であっても藩によってその対応は異なっていたと考えられる。ただし、武士の「切手」（往来手形）については今後の課題である。
- ③接待については、守川保忠は道中で受けた接待を日記に記録し、「筆紙に尽くしがたいほど、ありがたいことだ」と記している。一方、山水居蘭室の「春夏の杖」には接待の記述は一切見られない。推測の域を出ないが、蘭室ら一行も守川と同様、接待を受けたものと思われる。しかし、蘭室はそのことを「春夏の杖」に記載しなかったのではないだろうか。接待の記事と同様、金銭に関する記載もなく、この点は「春夏の杖」の史料的特徴・性格によるものと考えられる。
- ④「四国旅日記」と「春夏の杖」の特質として、藩士（武士）としての意識・要素が日記に現れる点を指摘することができる。その一方で、守川保忠は金工（職人）として、山水居蘭室は文化人（俳諧の宗匠）としての側面（属性）をうかがわせる記事が散見される。換言すれば、身分の他に属性に基づく意識・要素が遍路日記に投影されるのである。

本稿では、四国霊場巡礼者の日記の分類（類型）を試み、さらに「武士の四国遍路」という論点提示を行ったが、それにともない多くの課題が生起している。そもそも、藩士（武士）が遍路に出立するときの手続き（藩への事前申請や事後報告が必要だったはずである）についても不詳である。また、他の武士の遍路日記が存在するか否かをも含め、新たな史料の発見が今後の課題である。

註

- (1) 例えば、愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会編『巡礼の歴史と現在』（岩田書院、2013年）、『四国遍路と世界の巡礼』1～5号（2016～2020年）に収録された各論考、愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター編『四国遍路の世界』（筑摩書房、2020年）などがあげられる。さらに、四国四県が調査を進めている四国霊場と遍路道に関する学術成果も重要である。
- (2) 例えば、町田哲「遍路をめぐる三つの肖像—近世後期の四国遍路からみた民衆世界—」（『部落問題研究』226、2018年）では、自らは史料を残さない遍路の実態が追究されている。
- (3) 2020年10月発行の『伊予史談』399号では、「小特集「遍路日記」の世界」として、井上淳「近世後期における徳島町人の遍路日記—「四国順拝道中記」の紹介—」、東昇「天保五年山城國中畑村波多野富太郎の四国順拝」が収録されている。
- (4) 遍路日記を用いた近年の研究として、山本秀夫「旅としての「へんろ」」（『近世瀬戸内「浦」社会の研究』清文堂出版、2011年、初出2004年）、井上淳「道中日記にみる四国遍路—「四国西国順拝記」を中心に—」（『研究紀要』11、愛媛県歴史文化博物館、2006年）、胡光「「遍路日記」に見る四国、その内と外と」（『2013年度 四国遍路と世界の巡礼 公開講演会・公開シンポジウム プロシーディングズ』愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会、2014年）、西聡子「近世後期の遍路日記に関する基礎的考察—阿波商人酒井弥蔵の「旅日記」を例に—」（『書物・出版と社会変容』20、2016年）などがあげられる。さらに、江戸時代から現代にいたる巡拝記（遍路日記）を紹介したものに、佐藤久光『巡拝記にみる四国遍路』（朱鷺書房、2014年）がある。
- (5) 内田九州男「コメント：四国遍路の観点から」（『巡礼と救済—四国遍路と世界の巡礼— 公開シンポジウム・研究集会 プロシーディングズ』「四国遍路と世界の巡礼」公開シンポジウム実行委員会、2008年）。
- (6) 内田九州男「公開講演 コメント」（前掲註(4)『2013年度 四国遍路と世界の巡礼 公開講演会・公開シンポジ

- ウム プロシーディングズ』)。
- (7) 前掲註(4) 西聡子「近世後期の遍路日記に関する基礎的考察」。
- (8) 『四国遍路のあゆみ 平成12年度遍路文化の学術整理報告書』(編集・発行:愛媛県生涯学習センター、2001年)、前掲註(6) 内田九州男「公開講演 コメント」。
- (9) 武田和昭「遍路が残した日記」(『四国へんろの歴史 四国辺路から四国遍路へ』美巧社、2016年)。
- (10) 井上淳「近世後期における阿波小松島商人の遍路日記—「四国霊場順拝日記」の紹介—」(『平成29年度特別展 図録 研究最前線 四国遍路と愛媛の霊場』愛媛県歴史文化博物館、2018年)。
- (11) 近年、紀行文も道中日記と同様、歴史学で扱う史料として積極的に利用されている。原淳一郎『江戸の旅と出版文化—寺社参詣史の新視角』(三弥井書店、2013年)、高橋陽一「石碑のある風景—近世の知識人と松島—」(『近世旅行史の研究—信仰・観光の旅と旅先地域・温泉』清文堂出版、2016年、初出2015年)など参照。
- (12) 前掲註(4) 西聡子「近世後期の遍路日記に関する基礎的考察」。
- (13) 高橋陽一「旅の行程とその特徴—道中日記・紀行文の統計的分析—」(前掲註(11)『近世旅行史の研究』)や、佐藤顕「道中日記に見る紀伊の旅」・「地方神社の宗教活動—紀伊国海部郡加太浦淡嶋神社を事例に—」(『紀伊の霊場と近世社会』清文堂出版、2019年)及び自治体史などには、③のタイプの日記が数多く紹介されている。
- (14) 武間達也「資料紹介『四国旅日記 一鶴斎』～阿波金工・守川保忠巡礼日記から」(『刀剣美術』549、2002年)参照。
- (15) 高橋たけし『金工「浜野保随」の研究』(阿波刀剣小道具研究会、1970年)参照。
- (16) 宮本武史編『徳島藩士譜 下巻』(徳島藩士譜刊行会、1973年)7頁。さらに、徳島大学附属図書館が公開している「蜂須賀家臣団家譜史料データベース」(<http://www.lib.tokushima-u.ac.jp/dbhachi/hachi.html>)を閲覧の上、確認した。
- (17) 役職については、高田豊輝『阿波近世用語辞典』(高田豊輝、2001年)参照。
- (18) 史料については、橋本亀一編『八万村徳島市合併記念 家郷』(発行:橋本亀一、1938年)に、およその翻刻が掲載されている。なお、橋本亀一は鹿太郎の曾孫にあたり、戦前徳島の郷土史家である。前掲註(14)武間達也「資料紹介『四国旅日記 一鶴斎』」にも、内容を要約した現代語訳が紹介されているが、当時(2002年)「四国旅日記」の原本は所在不明だったようである。2013年度に古書店を介して徳島県立博物館が購入し、2014年度の展覧会『四国霊場開創1200年記念四県連携事業 空海の足音 四国へんろ展 [徳島編]』(編集:徳島県立博物館、発行:四国へんろ展徳島実行委員会、2014年)で公開されている。
- (19) 同様の認識は、当時遍路の間で共有されていたようである。井上淳「江戸時代の遍路統制」(前掲註(1)愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター編『四国遍路の世界』)参照。
- (20) 内田九州男「近世における四国諸藩の遍路統制」(「四国遍路と世界の巡礼」研究会編『第1回四国地域史研究大会—四国遍路研究前進のために—公開シンポジウム・研究集会プロシーディングズ』、2009年)参照。
- (21) 胡光「聖なる島と人々の邂逅—四国の文化と求心力—」(五十嵐敬喜・岩槻邦男・西村幸夫・松浦晃一郎編『四国遍路を世界遺産に 回遊型巡礼の道』ブックエンド、2017年)。
- (22) 協町史編集委員会編『協町史 上巻』(協町、1999年)参照。
- (23) 棚橋久美子編『阿波国上田美寿日記』(清文堂出版、2001年)参照。
- (24) 小一郎の父は稲田家家臣の三宅松庵(1737～1805)である。松庵は、儒者であり医者でもあり、詩歌・俳諧・書画などに通じた文化人であった。特に俳諧は「協町俳壇の祖」といわれる。なお、小一郎は大塩平八郎の遠縁にあたる(妻・加賀女の父・真鍋市郎の弟が大塩平八郎の祖父・政之丞とされる)。
- (25) 前掲註(23) 棚橋久美子編『阿波国上田美寿日記』、湯麗・劉潔・大橋真「日本の近世女性のあり方に関する一考察—阿波国における「桜戸日記」を中心に—」(『徳島大学地域科学研究』3、2013年)など。
- (26) 前掲註(22) 協町史編集委員会編『協町史 上巻』1127～1129頁に、文化12年3月5日から3月7日までの日記の翻刻が掲載されている。
- (27) 和田哲也「武田家の私塾「神全塾」について—その武芸教育を中心に—」(『日本の教育史学(教育史学会紀要)』35、1992年)、名倉佳之「私塾・神全塾について」(『阿波・歴史と民衆Ⅲ』編集・発行:徳島地方史研究会創立30周年記念論集刊行委員会、2000年)参照。
- (28) 遍路日記ではないが、武士の旅日記については、吉田松陰の日記(海原徹『江戸の旅人 吉田松陰—遊歴の道を辿る—』ミネルヴァ書房、2003年)や清河八郎の日記(清河八郎著、小山松勝一郎校注『西遊草』岩波書店、1993年)などが知られている。また、旅日記ではないが、大坂代官竹垣直道は年貢検見で摂津・河内・播磨・大和国に長期出張する際には名所や寺社を訪れ、それを日記に書き留めている(内海寧子「竹垣直道の名所見物」(藪田貫編、松本望・内海寧子校訂『大坂代官竹垣直道日記(一)』関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究セン

ター、2007年）参照）。本稿は、史料との出会いと上記の文献に着想を得たものである。

【付記】

本稿作成にあたり、多くの方々からご教示をいただきました。とくに、井上淳氏（愛媛県歴史文化博物館）、岡本佑弥氏（徳島市立徳島城博物館）、佐藤顕氏（和歌山市立博物館）には大変お世話になりました。記して厚く御礼申し上げます。なお、本稿校正中に、愛媛県歴史文化博物館編『明石寺と四国遍路』（愛媛県歴史文化博物館指定管理者 伊予鉄総合企画株式会社、2021年）に接し、新たな遍路日記の存在を知りました。あわせてご参照いただければと存じます。